

書評

キリスト教々育

高木 彰

現代、世界のキリスト教々育の一つの傾向を代表するものは
 エール大学神学部のミラー博士 (Randolph Crump Miller)
 であると思う。彼は一九五〇年以來矢継早に読みごたえのあ
 る著書を世に送り、斯界の注目を受けた。即ち、その最初の
 のは“Clue to the Christian Education” (1950) であり、つづ
 いて“Education in the Christian Living” (1956)、The
 Biblical Theology and Christian Education” (1956)、そし
 て最近 “Christian Nurture and the Church” (1961) を上
 梓、今年 (一九六二年) はアイルランドのベルファーストで開
 催された世界キリスト教々育研究大会 (The World Institute
 of Christian Education —— 四年前西宮、聖和女子短大を会
 場として開かれたものと同種) の研究委員長として、“Educa-
 tional Mission of Today's World” と題して毎日連続講演を
 行ったが、名実ともに今日の世界のキリスト教々育の頂点に立
 つ指導者であると言つて差支えないと思う。彼の試みは一言で
 いえば「キリスト教々育の神学的探求」とでも言うべく、それ

は神学への接近であり、一般の教育に教育哲学があるように、
 キリスト教々育にもキリスト教々育の神学とでも言うべきもの
 がなければならぬとするのである。

本稿を執筆するに当つて彼の近著 “Christian Nurture and
 the Church” を紹介したいと考えていたが、原書の人荷がお
 くれ、これに間に合わなかったので断念し、最近筆者が入手し
 たばかりの二書を紹介し、これをもってその任を果すことにし
 た。

(序に、ミラー博士の二書 “The Biblical Theology and the
 Christian” (1956) は安村三郎氏によって「聖書神学とキリスト
 教々育」の題のもとに訳出され教団出版部から出版されている。
 又 “Christian Nurture and the Church” は太田氏によって
 「教会教育」誌上に抄訳連載中である。

尚「世界キリスト教々育研究大会」に於けるミラー博士の講
 演及び他の発題者の講演は “World Christian Education”
 誌上に、日本語梗概は「教会教育」誌上に連載中であり、これ
 らによつて一応、世界のキリスト教々育の現在の動向を知るこ
 とが出来るであろう。(一九六二年九月)

Sara Little: The Role of the Bible in Contemporary
 Christian Education. (1961)

John Knox Press, \$ 3: 50

著者は一九五一年以来米国バージニア州リチモンドの Presbyterian School of Christian Education のキリスト教々育学教授として活躍している。博士号はエール大学から受けている。著書は多くないが米国長老教会のCSカリキュラム等に指導的な働きをし、本書の外、代表作としては“Learning Together in Christian Fellowship”がある。

本書は著者の長年の経験と研究とから生れたものであって、現在までのキリスト教々育のプロセスを分析して、将来に対する著者なりの方向づけを試みていっていると云ってよいであろう。

多くの同種の書の中でも、本書はキリスト教々育の現状を公平にしかも巧みに捕えている点、又問題を適確に指摘している点、参考となる所が多い。

本書は次の八章に分れている。

- 第一章 A Changing Perspective for Christian Education.
 - 第二章 The Theological Influence.
 - 第三章 The Meaning of Revelation.
 - 第四章 The Nature of the Biblical Witness.
 - 第五章 The Relevance of the Bible.
 - 第六章 The Appropriation of the Biblical Message.
 - 第七章 Consensus and Divergence.
 - 第八章 Toward a Point of View.
- 第一章に於て著者は今世紀(二十世紀)前半に於けるキリス

ト教々育発展の推移を概説しながら、その方向づけに問題があったことを指摘している。即ちキリスト教々育が宗教、教、育と呼ばれたその時代、子供中心の宗教々育が神学と無関係に進められて来たところにキリスト教々育の危機があった。その頃の斯界の指導者の労苦は多とするが、そのことは必ずしもキリスト教々育の本来的な在り方ではなかった。特に *Sola Scriptura* と言うプロテスタントの信条を思う時、聖書がどこまでもキリスト教々育の中心を占めねばならない。又このことから福音の中心である *Redemption* にまで焦点がしぼられねばならぬことを指摘している。

第二章に於て著者は現代の代表的神学者五人(W・テムプル、K・バルト、P・テイリヒ、E・ブルンナー、H・R・ニーバー)をあげ、彼らの神学を紹介しつつ、特に *Redemption* について、その理解の相違を明かにすると共に、それらが如何にキリスト教々育の理念に影響したかを次章に論じている。

第三章 本章では現代の代表的なキリスト教々育学者三人をあげ、彼らの思想を紹介しつつ、前章に述べた近代神学の影響によって、キリスト教々育がその本筋に帰りつつあることを明かにしている。三人の代表者とはスマート(James, D. Smart) (註: “Educational Mission of the Church”の著者、邦訳—「教会の教育的使命」)ミラー、シェリル(Lewis G. Sherrill)であるが、彼らと共に、ヴァイツ(Paul Vieth) (註: “The Church

and Christian Education" (1947)の著者、エール大学の
 劣作を高く評価し、彼の理念が古い理念から新しい理念への分
 岐点となっているといい、そして前述の三人の指導者のセオリ
 ーがキリスト教々の新しい視野を開くことに貢献したと述べて
 いる。著者にとって、こうしたキリスト教々のプロセスは
 一つ一つダイナミックなものとしてとらえられている。

第四章以下に於て著書は、神学と現代のキリスト教々の
 関連を巧みに論述しつつ、聖書の正しい理解こそがキリスト教
 々の根本であり、このことよつてのみキリスト教々は本
 来の使命を達成し得ると主張する。しかもそれは従来のような
 聖書主義、或は聖書中心の教育と言うことではなく、聖書の内
 容—福音—が最も具体的な形体をとつたのがキリスト教々育で
 あり、その意味に於てキリスト教々は *Servant of Revelation*
 であり、言が肉、体となることに外ならないと言っている。

かくて著者は "*Gospel-centered Curriculum*" を主張する。
 このことよつて聖書は最も多く、且つ有意義に用いられ、そ
 して神の啓示に関する人々の認識は深められ、キリスト教々育
 の使命がよりハッキリ決定されるという。キリスト教々のカ
 リキュラムは教会が神の啓示の事実を証し、その意味を明かに
 し、教会の抱べき所を示し、礼拝やその他の宣教活動を通し
 て、これに応答する時と場とを提供するものでなければならな
 い。

要之、著者は、現在、教会に最も要求されていることは、救
 に関する神の供物たるイエスキリストを証しすることであり、
 そのために教会はそれを真実に、然も誤りなく伝えるべく最善
 の方法を提供しなければならぬし、又一方人々が之に応答し
 得るように助けねばならない。その意味に於て聖書はキリスト
 教々の中心であるとしている。実はそこにキリスト教々の
 究局の目的も打出されて来るといふ。しかし、この事は決して
 福音そのものを聖書に用いられている「ことば」そのものと
 一視することではなく、むしろその「ことば」を通して神の救
 に関するメッセージを人々に提供し、聖書に於てのみ神が人と
 出合い給うと言う事実を明かにせねばならない。その場合、聖
 書はも早や我々人間によつて用いられる道具ではなく、神によ
 つて用いられる救の供物又はチャンネルなのである。

本書によつて読者はキリスト教々が従来或人々からおそれ
 られていたように、教会の業或は教義、又福音そのものから遊
 離するものではなく、むしろ教会を真に教会たらしめる僕とし
 てその使命を達成するものであることを認識させられるであ
 る。

Iris V. Cully: *Dynamics of Christian Education*. (The
 Westminster Press, Phil. 1958, \$3.75)

著者カーリ博士は二女の母、夫付もキリスト教々の教授

(シーベリ・ウェスタン神学校)である。著者はギャレット神学校でB・Dを、ノースウェスタン大学でPH・Dを受けている。彼女はケンダルカレッジ、シカゴバプテスト神学校、母校ギャレット神学校でキリスト教育学の講座を担当する外、多くの教団、教派のカリキュラム作成に指導的な活動をしている女流指導者である。

本書は著者自身の信仰から打出されたキリスト教々育論であるが、その主題に見る「ダイナミックス」と言う語が暗示するように、何か新しいひびきを全体として感じさせる興味ある労作である。著者によればキリスト教々育のダイナミックスは神御自身が人間に知らしめんとし給う恵の業によって生起するものであり、そのことがキリスト教々育の目的及び方法を決定する本質的なものである。そして従来なされて来たキリスト教々育原理の把握に対して、ダイナミックスと言う言葉をもって挑戦しているかのようなのである。

本書は次の八章からなっている。

- 第一章 The School and the Church.
- 第二章 The Context of Christian Education.
- 第三章 The Content of Christian Education.
- 第四章 Persons and Communication.
- 第五章 Arriving at Methodology.

書 評

第六章 Life-centered Methods: Participation.

第七章 Life-centered Methods: Recognition and

Communication.

第八章 Focus for the Future.

第一章に於ては学校教育とキリスト教々育の本質的な差異を述べ、キリスト教々育は文化的規準を拒否するものではないが、ただそれが絶対であることに賛成出来ない。キリスト教々育に於てはイエスキリストによって告知された神御自身がその規準である。従つて「キリスト教々育の目的は人々をしてキリストに於て育成される神との関係を通して、彼らが神に栄光を帰し、他の人々に奉仕するように生き、且つ今も後も永遠の生命にあずかると言う確信のもとに生きるように人々を助けることである」と定義している。

第二章以下に著者が用いたダイナミックスと言うことの意義を明かにするためにその要点をあげている。

先ず交りと言うことであるが、教会に於てはこの交りと言う語が基本的用語となつている。それは神の召命によって生起する人々の交りであつて他の如何なる交りともその内容を異にするものであり、そこに教会が果すべき人間関係の教育の可能性を見出すのである。

この交りの中心は事実の宣言即ちケリグマである。それについてデダケーが生起する。教会のメンバーはそのケリグマの

担い手であり、そのために教会は交りを通して教えると言うことを要求されるのである。教会が世に対して贖いの経験を証し、その子弟を養育するためにその交りは益々強化されねばならない。

第三章に於てはキリスト教々育の内容は神を知る、ことによつて決定される、ととく。それはただ抽象的な理念としてではなく、むしろ生ける神、歴史の主、愛の故に御手を降し給うた方、罪を贖いうる方、永遠の生命そのものとして、神を知ることである。そして神を実存として受けとめさせることの中にキリスト教々育の意義がある。このことをイエスキリストの生涯に読みとらねばならない。

第四章に於ては個人と交りについて取り上げている。その基本となるものは「神が人格である」と言うことであり、このこと以外に個人と交りの関係を説き得るものはない、としている。神は御自身をイエスキリストの中に人格として啓示し給うた。そしてこの神の深い恵と愛とは信仰において、人間の応答を喚び起し給うのである。人格はこの交り (Communication) のためのチャンネルである。教会はこの人格的な出会いによつて福音を伝達し、且つそのメンバーの霊的成長を促すのである。

思うに、従来のキリスト教々育は信仰を通して神が支え給う交りのチャンネルとしての人格について、殆んど無関心であったのではあるまいか。

第五章以下に著者はキリスト教々育のメソッドについて論ずる。その中心的なセンテンスは「教会もまた関係 (Relation) を通して教育する」と言うことである。即ち教会に於ける成人と子供との間に存する関係を通して教会の教育は行われねばならない。教会学校はその一つの現れであり、生徒たちは教師及び教会員 (成人) との関係を通して主に養われるのである。この意味に於て教会は家庭でなければならぬ。かくて新しく生れ来る世代に対して絶えず福音は受けつがれて行く。「本質 (the What) は信仰によつて受けとめられる、しかし行為 (the How) は愛によつて受けとめられるべきである」(ブルナー) と言うことがキリスト教々育にも当てはまる。

第六章及び七章、キリスト教々育のメソッドは「生活中心 (Life-centered) でなければならぬ。デューイー以来この「生活中心」又は「経験中心 (Experience-centered) と言う語はしばしば用いられて来たが、著者が意図する内容は従来と異つた深遠なものようである。「神が人間のために何をなし給うたかを実存的に理解するならば」キリスト教々育のメソッドは生活中心でなければならぬ」とする。

この生活中心のメソッドに二つの用い方がある。その一つは Participation (参与すること) であり、他の一つは Recognition and Communication (認識と交り) である。Participation (六章) の項で特に興味あることは、媒介としての芸術を

高く評価していることである。第七章に於ては、特に新約聖書の中心的教義及び宗教改革の教理の中に現代に於ける教育的意義を見出すことが出来ると主張している。即ち救は知識によるものではなく、ただ信仰によってのみ与えられるということがその主な理由である。

第八章即ち最後の章に於て著者は将来に目を向けつつ、カリキュラムに対する著者の主張を述べている。即ちカリキュラムはただ改良 (Reconstruction) されるだけでなく、常に創造的 (Creative) でなければならぬ。従ってカリキュラム作成者及

び指導者たちは彼ら自身キリスト教信仰の本質を充分わきまえ、それを如何に行為又は生活に移行させるかを工夫しなければならぬ。そしてキリスト教信仰生活の全貌が成長しつつある子供たちの前に常に有りのまま示され、決してかくされてはならない。このために著者は実存的メソッド (Existential Methods) を提案し、このメソッドの発展に期待をよせている。

(序に、著者は自己の理論を實踐すべく、ギャレット神学校に実験教育 (curriculum laboratory) を設け、その成果を見守っているとのことである。)
(京都・京北教会牧師)